



「One World, One Health」という言葉に由来する「One Health」は、「人、動物、環境（生態系）の健康は相互に関連している一つである」という考え方を表しており、人、動物、環境それぞれの健康に責任を持つ関係者が分野を超えて協力関係を構築し、健康を推進していく必要性を述べています。

このことから、日本医科大学、日本獣生命科学大学、看護専門学校、各医療機関が同じ法人の中にあり、同じものを目指していることを象徴する言葉として、「One Health」をタイトルとしました。

## CONTENTS 2024 MAR. Vol.563

- 02 特集 令和6年能登半島地震医療支援
- 13 定年退職者のメッセージ
- 20 メタバースを用いたイベントを初開催
- 21 TOPICS
- 22 受賞・表彰
- 24 公示
- 27 規程
- 29 学位記授与
- 30 会議
- 31 募金・寄付状況

表紙の写真：輪島市の白米千枚田（震災前に撮影）  
提供 付属病院高度救命救急センター 高橋 聡子看護係長

# 令和6年能登半島地震医療支援

令和6年能登半島地震により、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

災害医療において多くの経験を持つ学校法人日本医科大学では、発災直後より各病院が情報収集や派遣に備えた準備を開始し、様々な災害派遣チームの要請に応じる中で、それぞれが得意分野を活かし役割を果たしながら被災地への医療支援を行ってきました。今回の特集では、令和6年能登半島地震における各病院の医療支援について報告します。

## 令和6年能登半島地震

令和6年1月1日（月） 16時10分  
石川県能登半島で深さ16kmを震源とする  
最大震度7、M7.6

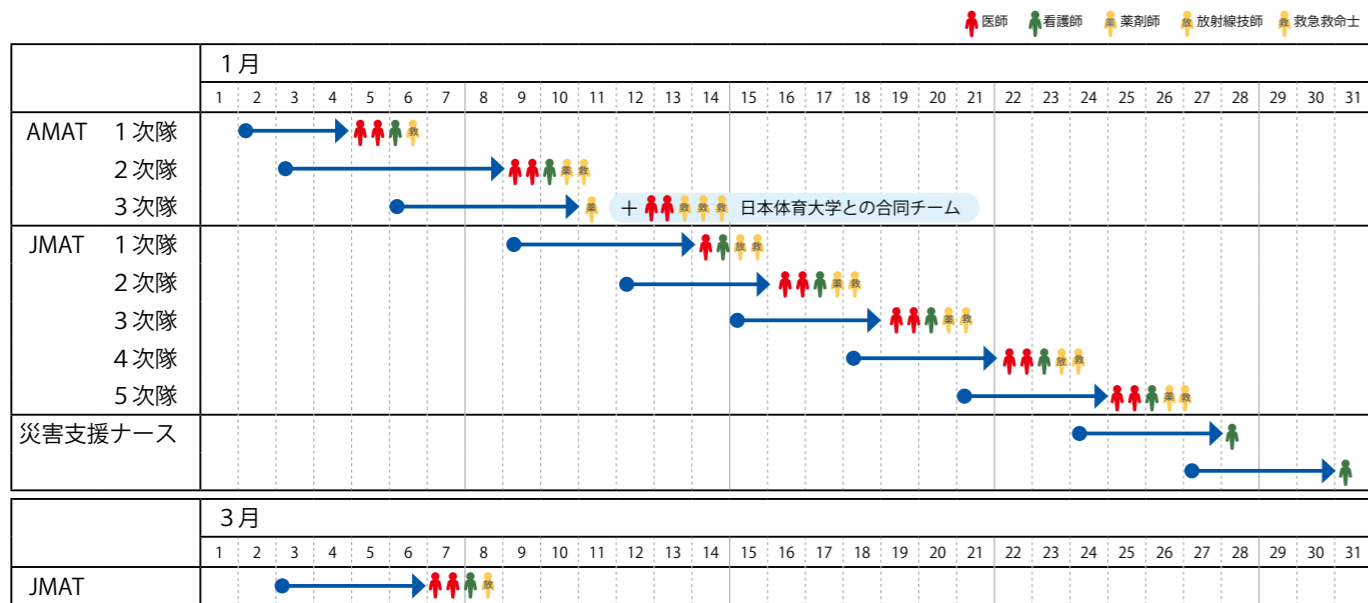


## 主な災害派遣チーム

チーム名	運営	概要
DMAT Disaster Medical Assistance Team 災害派遣医療チーム	厚生労働省	大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48時間以内）から活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チーム。
AMAT All Japan Hospital Medical Assistance Team 全日本病院医療支援班	全日本病院協会	災害の（急性期～）亜急性期において医療救護活動を行い、防ぎえる災害関連死を無くすことを主目的として活動する。
JMAT Japan Medical Association Team 日本医師会災害医療チーム	日本医師会	被災者の生命及び健康を守り、被災地の公衆衛生を回復し、地域医療の再生を支援することを目的とする。
DPAT Disaster Psychiatric Assistance Team 災害派遣精神医療チーム	厚生労働省	自然災害や航空機・列車事故、犯罪事件などの集団災害の後、被災地域に入り、精神科医療および精神保健活動の支援を行う。
DHEAT Disaster Health Emergency Assistance Team 災害時健康危機管理支援チーム	厚生労働省	災害発生時に1週間から数か月程度、被災都道府県の保健医療調整本部と保健所が行う保健医療行政の指揮調整機能等を応援する。
災害支援ナース	日本看護協会	被災した看護職の心身の負担を軽減し支えるよう努める。被災者の健康レベル維持のため、被災地で適切な医療・看護を提供する役割を担う。

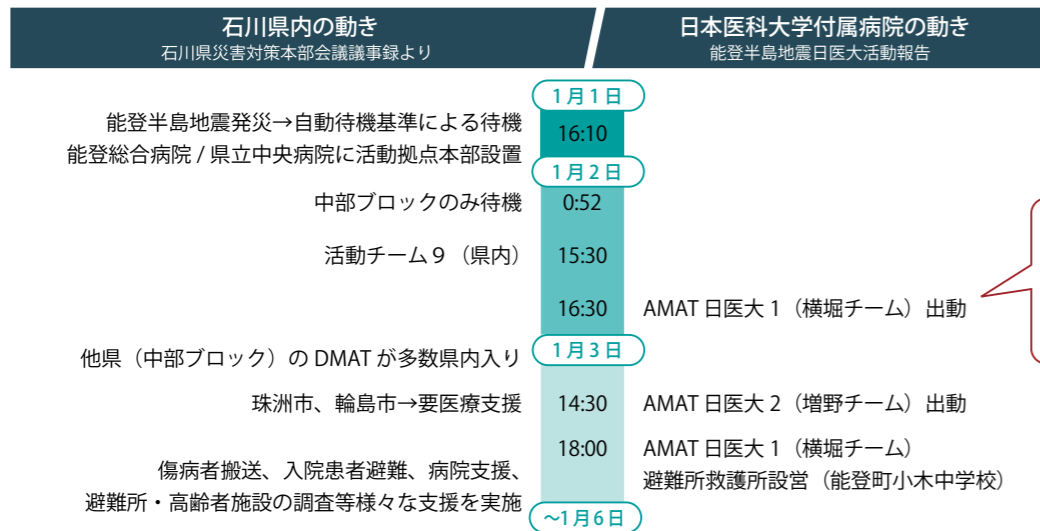
このほか、日本赤十字社の「日赤救護班」、独立行政法人国立病院機構の医療班、NGO、NPOなども災害時に医師を派遣しています。また、福祉やリハビリテーション、栄養のチームも専門家チームも活動し、現地で各チームが連携しています。

## 発災翌日に AMAT（全日本病院医療支援班）先遣隊として現地での活動を開始 多職種による連携で、シームレスな支援を提供



### 能登半島地震における付属病院の対応

(救命救急科 教授 布施 明)



日本医科大学付属病院は、DMAT等の医療チームが到達していない被災地での迅速かつ継続的な医療支援を行いました。

### 多職種による連携

様々な職種が派遣され、それぞれの専門性を活かして被災者の支援を行いました。



#### 薬剤師

発災後、急性期近くから慢性期への移行期に至る時間経過の中で、求められる薬剤師業務は変遷します。被災した薬剤師に代わって、あるいは協働しての調剤や、環境整備、日常業務への橋渡しなど、現地のニーズに沿った支援活動を行いました。

#### 心血管集中治療科(CCU)/循環器内科

心不全や肺塞栓・深部静脈血栓症などの循環器疾患が増えてくるフェーズを見据えて活動に参加。発災後11～23日の亜急性期に循環器疾患の急性期対応、疾病スクリーニング、予防に関わりました。

#### 診療放射線技師

ロジスティシャンとして、チームが安全でベストな活動ができる環境づくりに尽力。「機敏・機転・気配り(ロジの3K)」を大切に、インテリジェンス(情報)とロジスティクス(ひと・モノ・コト)の両面から活動全体の管理調整を行い、チームをサポートしました。

#### 看護師

医療だけでは災害関連死を予防できないため、DHEAT、災害支援ナース、DWATなど他の支援チームと連携しながら、被災者の生活と健康を守ることに重きをおいて活動しました。被災者の生活に寄り添った支援を心がけました。

#### 救急救命士

急性期から亜急性期にかけて、救護室や療養部で救急救命処置を行い、「診療」と「療養上の世話」に対してサポートを行いました。また、災害医療ロジスティクス業務を実践しました。

## ▶ AMAT (1～3次隊)

報告者：救命救急科 講師 増野 智彦

- ▶ 活動場所 能登町立小木中学校・小学校避難所救護所
- ▶ 主な役割 救護所運営

付属病院では、発災直後から情報収集を開始していました。DMATも出動に向けて待機していましたが、日付が変わると間もなく中部地方以外のDMATは待機解除となりました。しかし、全日本病院協会の医療チームであるAMATなどから情報が入り、医療ニーズ調査のため2日11時にAMAT先遣隊の派遣が決定。16時に横堀大学院教授率いる1次隊が出発しました。その後、2次隊が3日朝に出発。5日には日本体育大学と合同チームで3次隊が出発し、切れ目のない支援を行いました。



私たちが支援に入った能登町の小木中学校避難所では、地元の開業医が一人で避難所の医療を支えていました。現地の医療者もまた被災者であり、彼らが疲弊しないようにすることが必要です。私たちが支援に入ることで、避難所だけでなく能登町の地域医療を支え、災害関連死を出さずに円滑に復興につなげることを目標として活動を開始しました。

避難所では、電気は通っていたものの断水しており、トイレや手指消毒など衛生環境の改善から着手しました。また、処方の再開や新型コロナウイルス感染症が拡大したことによる隔離も行いました。また、DMATやDHEAT、DPAT、DWATなどの専門家チームを迎える準備・現地の医療ニーズの把握(能登町)・急性期の避難所支援、医療の負担軽減・感染症拡大防止・上位組織との連携による支援体制整備も行いました。

## ▶ JMAT (1～5次隊)

報告者：救命救急科 准教授 中江 竜太

- ▶ 活動場所 能登町立小木中学校・小学校避難所救護所
- ▶ 主な役割 救護所運営

AMATを引き継いで1月9日から活動を開始し、本学のチームは1次隊から5次隊までを派遣しました。チーム構成は隊により医師1～2名、看護師1名、業務調整員1名(放射線技師、薬剤師)、救急救命士です。

AMATはDMAT、JMATに比べてより長期的な支援を行い、災害関連死をなくすことを目標の一つとしています。活動期間が長期に及ぶため、隊によって主な活動内容に変化が見られました。

1、2次隊は主に災害関連疾患・災害関連死の防止や、感染症対策に力を入れました。3次隊以降は復興の動きが出はじめ、学校再開に向けた支援や段ボールベッド設置を行いました。5次隊は撤収に向けて能登町の医療機関の状況を確認し、本部に

報告するなど、医療を地域に戻すための調整を行い、最終的には災害支援ナースに引き継いでJMATの活動を終わりました。

各隊では、避難者の話を聞きながら、寄り添い型の支援を行って来ました。避難者、職員、ボランティア、災害支援チームがお互いを信頼することでスムーズな支援につながったと感じています。各隊が同じことをするのはなく、それぞれが新しいニーズを探り、それぞれが違う役割を果たしたことで、小木中学校・小学校避難所における災害関連死ゼロを達成できたのではないのでしょうか。



### ▶ 報告会

オープン・ホスピタル・デイ & 能登半島地震・ガザ医療支援緊急報告会



2月12日(月・祝)に付属病院にてオープン・ホスピタル・デイ報告会を開催しました。一般から広く参加者を募り、会場は満員となりました。オープン・ホスピタル・デイは、子どもから大人まで楽しめる参加型のプログラムが用意され、休憩時間にはわたあめ作りを体験。その後、能登半島地震・ガザ医療支援緊急報告会がハイブリッドで開催され、参加者は熱心に耳を傾けていました。

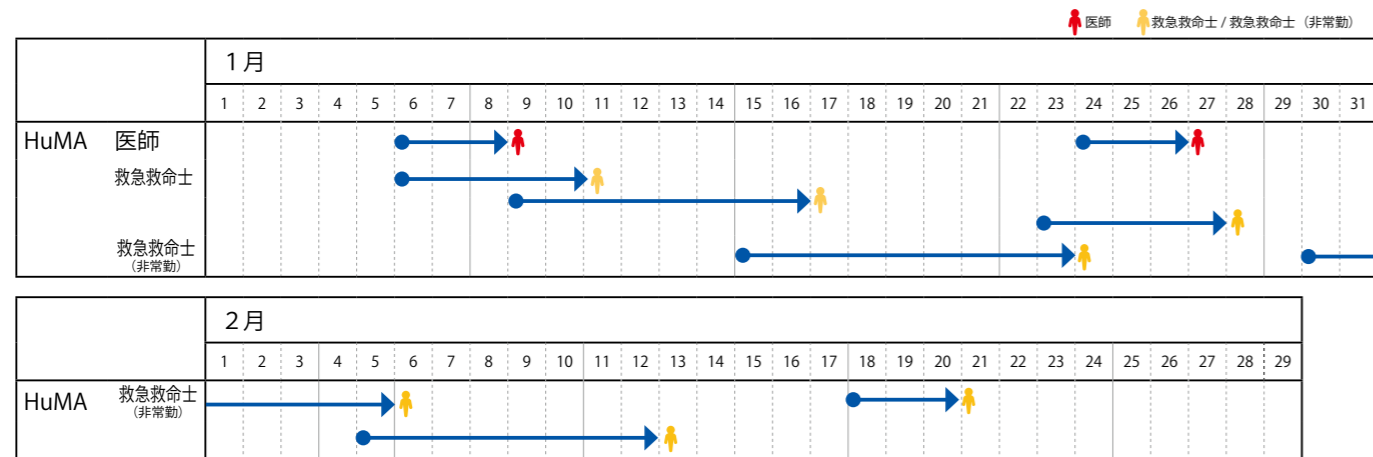








## 公的支援が届きにくところに手を差し伸べる NGO 「HuMA」での活動



トルコ・シリア地震医療支援においても、救助が遅れた地域の医療を支えた HuMA（災害人道医療支援会）。能登半島地震ではそのネットワークの軽さを活かし、発災翌日から先遣隊が被災エリアに入り情報収集を開始しました。DMAT を始めとする様々な公的な医療支援がある中、それらが届きにくい場所にニーズを見つけ、被災者の支えになれるよう努めています。

### ▶ HuMA

報告者：救命救急センター長 久野 将宗 (HuMA 常任理事)

- ▶ 活動場所 珠洲市立宝立小中学校避難所内に開設した救護所
- ▶ 主な役割 救護所の運営、避難所環境への支援、周辺地域における介護施設や孤立集落・在宅避難者などの調査、往診など



HuMA では発災当日にオンラインミーティングを行い、翌日には先遣隊（医師、看護師、救急救命士）を被災エリアに派遣しました。提携 NGO であるピースウィンズ・ジャパンとも連携しながら情報収集を開始。校内に宿泊場所を確保させてもらったことで珠洲市宝立小中学校避難所内に救護所を開設すると、地震で怪我をした後にどこにも受診できず困っていた方が続々と相談に訪れました。この他にも HuMA は産婦人科医や助産師を派遣し、被災した病院でお産の支援を行っています。政府機関や国際機関による支援が届きにくいところや、ニッチなニーズを見つけて寄り添うことを得意としています。医療につながるものであれば何でもできるのが、私たちの強みです。

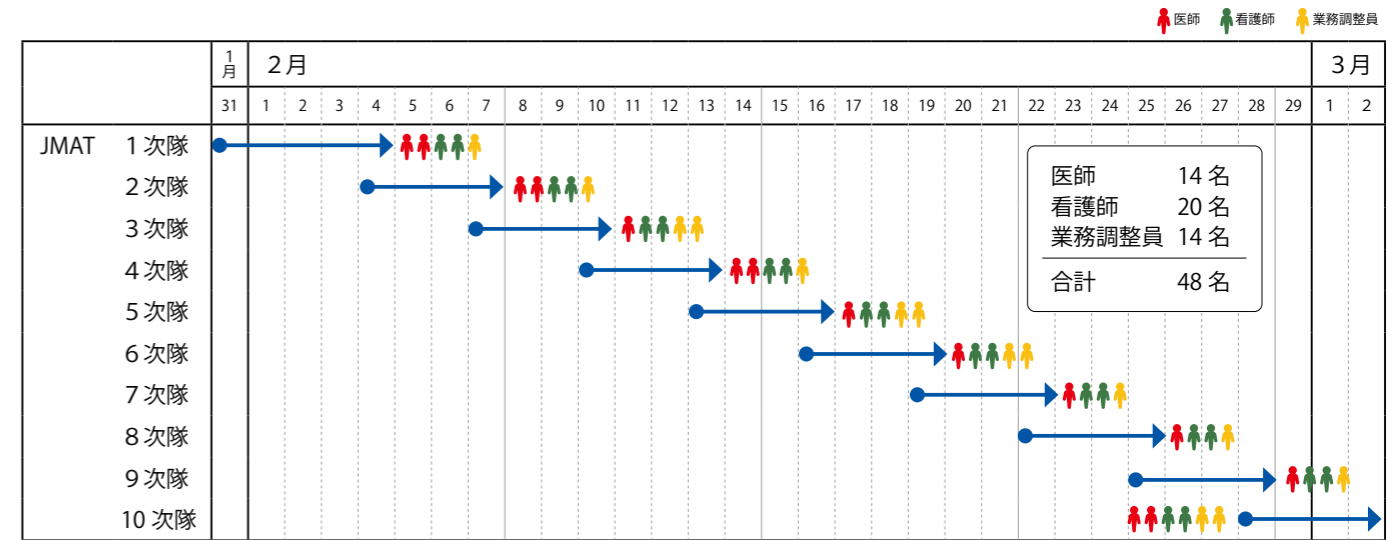


災害人道医療支援会（Humanitarian Medical Assistance）という特定非営利活動法人（NGO）で、災害医療に関わる研究・教育を推進する目的で設立されました。国内外での大きな災害時に医療チームを派遣し、国家間協定や条約、国内法などの制約に拘束されず、あらゆる種類の災害の被災者に柔軟に人道的医療支援を行う NGO です。

HuMA Web サイト <https://huma.or.jp/> ▶



## 能登半島地震で唯一の1ヶ月継続派遣 多摩永山病院全体で支えた支援のリレー



医師 14名  
看護師 20名  
業務調整員 14名  
合計 48名

東京都医師会からの依頼を受け、2月1日より1ヶ月間の計画で多摩永山病院から日本医師会災害医療チーム（JMAT）として医療チームを派遣しました。一人でも多くの職員に災害医療に関わってほしいとの思いから、院内で派遣希望者を募り、医師・看護師・業務調整員として救急救命士、薬剤師、臨床検査技師、言語聴覚士、理学療法士などによる4～6名のチームを構成。各チーム3泊4日で合計10隊の派遣を行いました。長期にわたる支援の中で、フェーズに応じて様々なニーズがありましたが、各隊が本部業務を円滑に引き継ぎ、任務を遂行することができました。

### ▶ JMAT（1～10次隊）

報告者：救命救急センター長 久野 将宗

- ▶ 活動場所 JMAT 能登北部調整支部  
(2月1日～28日 穴水総合病院、2月29日～3月2日 輪島市役所)
- ▶ 主な役割 JMAT チーム運用調整



当院は東日本大震災で1ヶ月にわたる支援を行った実績があり、今回も同様の期間で派遣要請に応じることにしました。

私たちは、JMAT 能登北部調整支部において、能登北部の医療ニーズを把握し派遣されてきた JMAT のチームの派遣先の調整を主な業務として行いました。調整本部の業務は現場での活動とは異なる経験が必要とします。初めての本部業務となるメンバーも多く、事前にオンラインでの引き継ぎを行いスムーズに連携できるよう工夫しました。活動期間中は、穴水町、能登町、珠洲市、輪島市の各地域に派遣されている JMAT 各隊の情報の集約・コントロールを円滑に行うための

仕組みや、他の医療チームとも連携協議できる体制を整えるとともに、医療ニーズ減少に応じた派遣チーム数の適正化を図りました。

派遣メンバーだけでなく院内での後方支援など、多くのスタッフの協力によって1ヶ月の活動を無事終えることができました。

### メンタルケア

多摩永山病院では、派遣前オリエンテーションとして、災害医療の仕組みやメンタルケアについての勉強会を開催しました。災害支援活動では、被災者や支援者だけでなく、医療者自身のメンタルケアも重要です。派遣終了後は十分な休養を勤めるとともに、ストレスチェックを行い、臨床心理士が継続的なフォローを行っています。

### ▶ 報告会 能登半島地震災害医療派遣報告会



3月19日（火）に報告会が行われ、各隊から活動報告がありました。病院関係者や南多摩医療圏の医師会など多くの参加があり、関心の高さを伺うことができました。

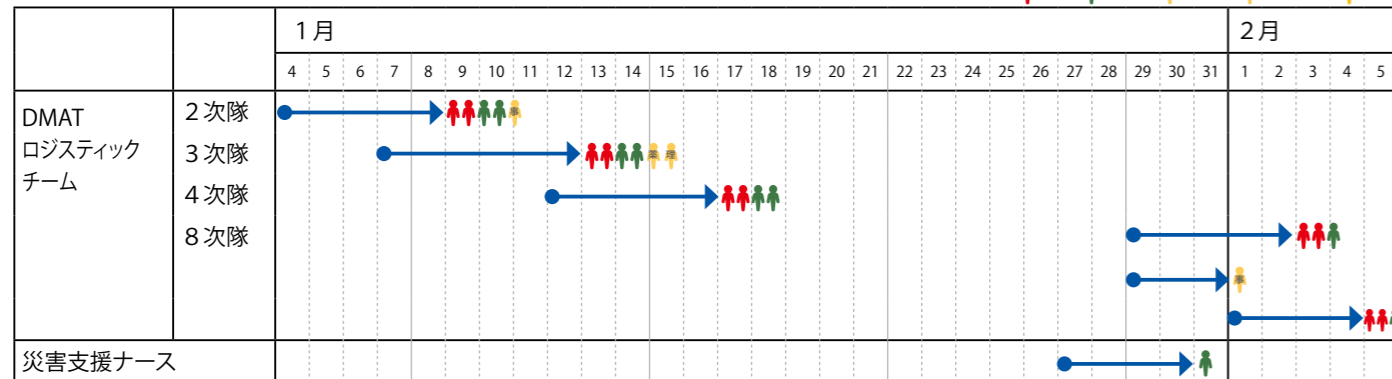


DMAT ロジスティックチームで  
ドクターヘリ等による空路・陸路の搬送調整

NHK の取材を受けました  
能登半島地震 千葉から現地入りの救急医  
「ニーズ増え長期戦に」



医師 看護師 薬剤師 理学療法士 事務員



ドクターヘリ基地病院であるため、DMAT 搬送調整部門で活動することが多い千葉北総病院。ロジスティックチームとして、過去の災害での活動経験や平時における訓練の成果を活かして空路や陸路での搬送調整を担当し、患者さんや高齢者の安全な搬送に貢献しました。

01 ロジスティクス

医療活動に関わる通信、移手段、医薬品、生活手段等を確保すること。DMAT 活動に必要な連絡、調整、情報収集の業務等も含まれます。

02 DMAT ロジスティックチーム

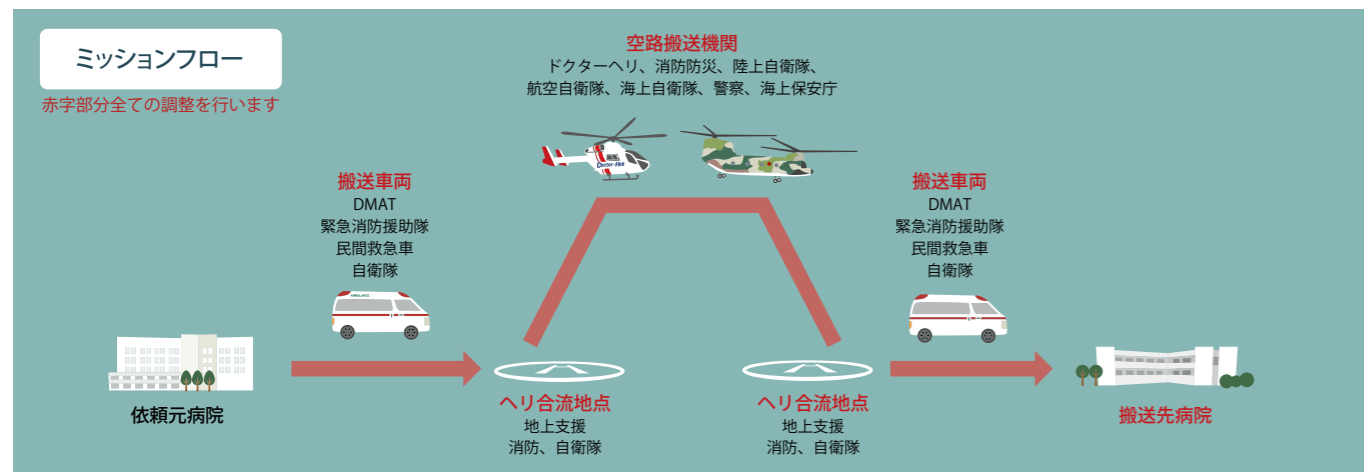
本部業務において、統括 DMAT 登録者をサポートし、主に病院支援や情報収集等のロジスティクスを専門とした活動を行います。

DMAT ロジスティックチーム隊員になるには？

日本 DMAT 隊員資格を有した後、厚生労働省等が実施する「DMAT ロジスティックチーム隊員養成研修」を修了し、厚生労働省に登録される必要があります。DMAT ロジスティックチーム隊員は、災害時に DMAT ロジスティックチームとして活動する資格を有します。

参考：日本 DMAT 活動要領 (http://www.dmat.jp/dmat/katsudoyoryo.pdf)

- ▶ 活動場所 ドクターヘリ本部（石川県立中央病院）および DMAT 調整本部・航空運用調整班（石川県庁）
- ▶ 主な役割
  - ①空路・陸路搬送の要請対応
  - ②搬送先・搬送手段の選定、調整
  - ③飛行計画策定
  - ④運航管理



▶ DMAT ロジスティックチーム (2~4、8次隊)

報告者：救命救急センター 講師 本村 友一



千葉北総病院は、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震で全国のドクターヘリを使って患者さんを被災地外に搬送した経験から、厚生労働省における空路搬送の指針作成や実務的なルール決め、教育・訓練などに携わってきました。

令和6年能登半島地震では、発災当日の夕方には DMAT 事務局より、ロジスティックチームとして DMAT 搬送調整部門での活動について打診がありました。一次隊は他院にお願いし、体制を整え、二次隊以降を当院 DMAT チームが担当しました。

今回、悪天候や運航時間の制約によりドクターヘリが飛べない日も多く、飛行条件が異なる他の航空機保有機関（消防、陸上自衛隊、航空自衛隊、海上自衛隊、警察、海上保安庁）との調整が、ミッションを果たす上で重要な役割となりました。また、複数のドクターヘリが同時に活動し、丁寧な飛行計画が求められる場面もありました。

被災地能登半島の医療支援では半島特有の課題がありましたが、房総半島からなる千葉県も、災害時には同様のことが起こり得ます。当院は千葉県の基幹災害拠点病院として、多数の患者と災害支援者の受け入れが求められますので、平時から訓練を重ね、危機感を持って準備していききたいと思います。



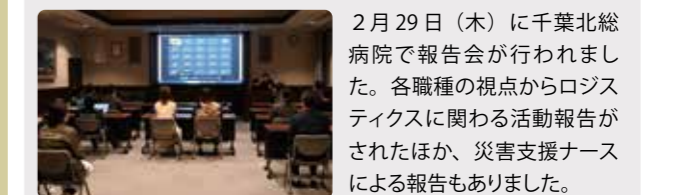
多職種連携

DMAT は原則医師 1~2 人、看護師 1~2 人、業務調整員（ロジスティクス）1~2 人の 5 人で構成されます。ロジスティックチームも同様で、各職種がそれぞれの立場から役割を果たしました。

平時の訓練

WEB 会議システムで千葉北総病院での研修を配信したり、他の基地病院と連携したシミュレーション訓練を行うなど、トレーニングを重ねた成果が発揮されました。平時から他県基地病院とつながりを持ち、顔の見える関係を築いていたことで、スムーズな業務調整ができました。

▶ 報告会 令和6年度能登半島地震 DMAT 活動報告会



2月29日（木）に千葉北総病院で報告会が行われました。各職種の視点からロジスティクスに関わる活動報告がされたほか、災害支援ナースによる報告もありました。

ドクターヘリによる医療搬送の件数

	1月																												2月					計
	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	
天候	☉	×	☉	☉	☉	×	○	○	×	☉	×	×	☉	×	×	☉	×	×	×	×	☉	×	×	×	×	×	☉	☉	☉	×	○	○	☉	
石川	4	3	3				1	4	4		3	4	1				1	2	1	2								1	1					
富山	1	2	2	2			1	2	3	3		1	3	1																				
福井			1	2					2	1			2																					
愛知	4									2																								
岐阜									3				1																					
浜松			1	2													2																	
信州	1																																	
松本									3																									
佐久				1								2																						
藤田*												1																						
計	10	7	10	2			1	3	15		13	7	9	2			1	2	1	2							1	1				87		

空路搬送 713 件（うちドクターヘリによる搬送 87 件）、陸路搬送 767 件

\*藤田医科大学は、正式にはドクターヘリ運航開始前



## 被災者により近い場所で心身のケアを行う

### 災害支援ナースとは

都道府県看護協会に登録された看護職団体の一員として、被災した看護職の心身の負担を軽減し支えるよう努めるとともに、被災者が健康レベルを維持できるように、被災地で適切な医療・看護を提供する役割を担う看護職のことです。



#### 災害支援ナースになるには？

以下の要件を満たす必要があります。

- ・都道府県看護協会会員であること
- ・5年以上の実務経験があること
- ・災害支援ナース養成のための研修に参加していること
- ・所属施設の所属長の承認があること



能登半島地震での活動の様子（千葉北総病院 似田貝看護師提供）

令和6年4月以降、DMAT・DPATと同様、災害支援ナースについても、「災害・感染症医療業務従事者」に位置づけられます。これによって、災害救助法・改正感染症法の規定に基づき、派遣費用が公的に負担されます。災害支援ナースの業務が「医療機関における業務」として、安定的かつ安心して実施できる環境が整備されることで、今後ますますその活躍が期待されます。

#### 01 活動場所

原則として、被災した医療機関・社会福祉施設、避難所（福祉避難所を含む）を優先します。

#### 02 被災地での活動時期や活動期間

発災後3日以降から1カ月間を目安とします。個々の災害支援ナースの派遣期間は、原則として、移動時間を含めた3泊4日です。

参考：日本看護協会（<https://www.nurse.or.jp/nursing/kikikanri/saigai/index.html>）、厚生労働省（<https://www.mhlw.go.jp/>）、日本DMAT活動要領（<http://www.dmat.jp/dmat/katsudoyoryo.pdf>）

### 災害支援ナース INTERVIEW



千葉北総病院  
看護部 中央手術室  
主任看護師 似田貝 里美

- 災害支援ナースになったきっかけを教えてください。  
東日本大震災で、祖父母が住む岩手県の慣れ親しんだ町が被災しました。ボランティアではなく、看護師である自分にできることは何かを考えた結果たどり着いたのが、日本看護協会災害支援ナースでした。
- 災害支援ナースにはどのような役割があるのでしょうか？  
被災した医療機関における看護業務や、避難所における心身の体調不良者に対する受診支援、医療チームへの橋渡し、救急搬送などを行います。



避難者の方と撮影した思い出の一枚。涙を浮かべて「もう帰るの？私も連れて帰って」と私の隣に立ち、寒い中、帰りのバスが来るまで見送ってくれました。顔は恥ずかしいからと撮影NGで、足元だけ撮影しました。

- 能登半島地震での活動について教えてください。  
私の派遣先は輪島市ふれあい健康センターに開設された避難所で、130人前後の避難者が生活していました。4名のチームで活動し、避難者や支援者とコミュニケーションを大切にしながら、健康支援や、施設内の環境整備・指導を行いました。4日間という短期間の活動ではありましたが、様々な災害派遣医療チームがある中でも、より被災者に近いところで生の声を聞き、心のケアを行うことが災害支援ナースに求められる役割だと感じました。



2024. MAR. Vol.563

# 令和6年能登半島地震医療支援